

---

# ウサギ見てクマを放つ

umemura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウサギ見てクマを放つ

### 【Zコード】

Z5369Y

### 【作者名】

umemura

### 【あらすじ】

建材問屋に勤める32歳の熊本武は、とある手芸店の前で衝撃的な出会いをする。「なんだ、この可愛い生き物は!」 脳みそまでみつちり筋肉質な熊体型の男が、小動物タイプの女性に一目ぼれしてそういう雰囲気になるまでのおはなし。

世の理不尽に翻弄されるのは社会人の常であるとはいえ、金にならない忙しさは心身に堪えるものだ。

今年で三十一になる彼　くまもと熊本たけし武は、下げたくもない頭を低く低くしながらそう思つた。

彼は業者向け建材問屋に勤めて数年になる。

今日も、彼の会社がシステムキッチンを卸した工務店が施工業者とトラブルを起こしたという連絡が入り、現場へと火消しにはせ参じた次第だ。

半ドンのはずだった土曜就業は、今日も間延びした忙しさに見舞われそうである。

一通り挨拶の終わった武は、社用車へ戻る前にコーヒーで一服でもしようと自動販売機に立ち寄つた。

はたして間の悪いことに、誰かがドリンクを選んでいる最中である。最寄りのコンビニを探すのも億劫だった武は、先客である女性のすぐ後ろに並んだ。

何とはなしに、その後姿を眺める。

ふわふわとたつぱりした黒髪が首筋でかき分けられ、目に眩しいほどまつ白いうなじが初夏の陽射しに晒されていた。

襟ぐりの大きくあいた生成りのワンピースからは、素朴ながらも誠に精緻なオフホワイトレースが覗いている。

ぱってりしたパフスリーブからのびる柔らかそうな一の腕も、ひらひらフレアシルエットからちょっとぴり見えるふくらはぎも、匂い立

つよくなすべらかさであった。

なんとも美味そうな背中である。

横にも縦にも大柄な武は、目の前の「ぐぐく」小柄な女性を上から覗き込む形となつたわけだが、魅惑的な曲線を描くならかな双丘もその谷間もばつちり視界に入れていた。

つんと上をむいた、実にふくよかで形よいバストである。

自販機の取り出し口に屈んだ彼女が、その小さな手には少し大きすぎる財布をかかえて立ち上がる。

振り向きたま、ベビーパウダーの香りが武の鼻をかすめた。

「まあ、お先です」

しろウサギ！

律儀にも会釈してよこした彼女を正面から見た瞬間、武は雷でうたれたような衝撃を覚えた。まつちりの、ウサギが、こじこじーーー！

武の田には、彼女の小さい頭からひょいと生えるふこふこの耳が見えるようであった。

ちょっぴり首をすくめてこちらをうかがい、くじくじお田田をじばたかせる仕草は、まるで臆病なウサギである。

全体的な色白・小柄さもあいまつてか、武のような無骨者でさえ「ポツケに入れて大事大事したい」という庇護欲に抗いがたかった。白皙でちんまりと小柄、さらにはとっても愛敬のある容姿に、だめ押しで巨乳ときたもんだ。

アノミー状態となつた武のオツムを代弁するとしたら、この点に集約するといつていい。

好みとかそういう次元を吟味するまえに、彼は田の前の女性をむんずと抱きかかえて家に連れて帰りたくなつた。

なんだ、このかわいい生き物は！

彼女はすでにその場を後にしていたが、武は彼女の胸元にあつたネームプレートについてぼんやり思案していた。

小さい文字でよく見えなかつたが、確か『どんぐり手芸』と書いてあつたように思われたのだ。

このあたりに手芸店などあつたろうか、と武は公団住宅の立ち並ぶ周囲を見渡した。

そこで、道路を挟んで向かい側に、先ほどの彼女がぼてぼて歩いているのを眺めとく見つける。

彼女は、まるで流行りのカフェのような店構えに入つていった。白塗りされたドアの隣にはお決まりの黒板が出されているわけだが、そこにようやく『どんぐり手芸』の文字。

ガラス越しにも洒落た照明やら椅子やらが目を引くあの店は、まさか手芸店だという。

彼の田舎にある、値引かれた毛糸や布地を所狭しと並べるだけの埃っぽい店屋とは随分毛色が違つていた。

武はがっかりした。モロ体育会系な職業の俺と、手芸屋の店員じゃあ、どう逆立ちしたってご縁もクソもない。

「うん？」

足元でひらひらしているものを何気なく拾つてみると、リネンのハンカチだった。

そう、どんぐりの刺繡が入つた、リネンのハンカチだった。

「うわ、うわわー。」

とつあえず良い予感しかしない。ぜったい、うん、これはまさしくそひ、えつと、ぎゅうじゅつ。

僕倆かどつかは置いておいて、ロマンティックなふち編みのハンカチから漂うベーパウダーの香りは、武にそういう《＼＼＼＼》予感を味わせるのに十分だった。

\* \*

後日、意を決して彼はどんなぐり手芸を訪れていた。

いかにも瀟洒な北欧風インテリアがゆつたり据置かれ、色とりどりの手芸品がかわいらしい棚やバスケットに陳列されている。春物ストールやベストの作品サンプルは、男の武でさえも思わず「こんなものが作れたら服や何やらを買う必要がなくなるなあ」と感嘆するほどの出来栄えであった。若い女性でにぎわう繁盛ぶりも、なるほど道理である。

さて。

偶然掴みかけた件の女性との縁、ほぼ在りて無くようしなその縁を、武は放し難く感じていた。

もしこのハンカチが本当に彼女の落し物だったなら、もちろん彼女の手元に返してあげて。

「いつもわざわざスミマセン」いえいえ、みたいな雰囲気になつて。いお店ですねあります、みたいな雑談をかましつつ。手芸とかに「興味がおありなんですかまあチヨット嗜む程度に、みたいな嘘八百を交えるかも。それから それから?

武は、考えるのをやめた。

もともと食事に関して野暮つたにとどくのある武は、そういう算段をつける器量がないのである。

知り合つて食事をしてねんじりになつて云々のプロセスを楽しめる男ではないのだ。

質朴、訥弁といえば聞こえは良いが、有体に言つて口下手が過ぎるのである。

武は、考えるのをやめる悦びに浸つた。

今はただ、この不安と期待を楽しめばいい。だって、そういう『、、、、』ことまだあんにも始つていないのでから。

あの日拾つたハンカチを何度も手に取つては、尻のあたりから鳩尾を通つて胸に去来する寒慄を武は愉しんだ。

人はその震えを「恋のときめき」やら「胸きゅん」やらと呼ぶわけだ。

もちろん武も弁えてはいるが、今はそこで足踏みをする自分勝手さを満喫したいのであつた。

毛糸「一ナ」の一角にある展示スペースの前で武は足を止めた。

そこには、犬や猫をはじめとする様々な動物の編みぐるみが並べられていたが、中でも武の目を奪つたのは、やはり、白兎の編みぐるみであった。

ええ、何だこれ、かわいい。かわ、かわ、かわいい！

特に、サーモンピンクのお鼻とふりふりの尻尾に視線が釘付けである。

しかし、これは売り物なのだろうか。値札が見当たらない。ああ、じつこいつときにこそ店員が話しかけてくれたらいいのに。

「その鬼さん、とっても触り心地がいいんですよ。よかつたら手にとつてござらんください」

ホンモノ！

武のウサギさんは前触れもなく現れた。彼女だった。

胸元のプレートにはあの口と変わらず「『じんぐり手芸』のロゴ」と、下にちこちく名前が書いてある。丸文字で、「守佐野まみ」。

「ええ」

氣の利いた返事のひとつでも、と編みぐるみを眺めるが、もやもやとした衝動が喉元につつかえるだけであった。

くつたりしたお耳やふにふにお口がどうして可愛いのかを説明する語彙が、はたしてこの朴念仁にあるはずもない。

彼の手は、鞄の中で例のものを手探しするとこつ逃げを打つていた。

「「これ。こないだそこで拾つたんですけれど。あなたが落とされた  
よつに見えたのですが」

しまつた。武は思った。

もつと会話を楽しんでから本題に入るべきだったと早くも後悔の嵐  
である。

これでは、あつさつと用件が終わつてしまつ。

「「つか、ほんとこーこれ私のハンカチです。まさか見つかると思つ  
てこませんでした」

わざわざ届けてくださるなんて、何とお礼を申し上げて良いか。宇  
佐野は元々やわこい顔立ちを猶もふにやふにやほこりばせた。  
小さい身体をちまつと縮めてペレペレ頭を下げる度に、あの何とも  
言えず良い香りがする。

むぎゅ、ひりへ、と武の腕にあつた編みぐるみがふた回つほど小さく  
なつた。

だめだめだ、この笑顔はだめだ。こひ、む、胸が苦しい。苦しい  
？ちがうちがう、もう、くるしきもあこ。

もともと考へることの得意でない武の筋肉質な脳みそは、より一層  
血の巡りを悪くしていった。

そこからの記憶は定かではない。

彼女のお礼に適當な相槌をうつてからは当然間が持たず、おおむね  
社交辞令の範疇を出ない応酬で打ち止めとなつたのである。  
脇に編みぐるみをしつかり抱えたまま店を出そうになつた武は、い

まだ彼女の留まる編みぐるみコーナーに戻る気概もなくて、結局白兎をお買い上げしたのであった。  
またおこしくださいませー。

といひで。

自分のことでいっぴいっぴいだつた武は知る由もないけれど、やはり女性客ばかりの手芸店において彼の姿は相当浮いていた。  
無論彼が男性だからというのも一つ理由はあるが、そもそも彼はどこに居たつて人目を引く風貌をしているのである。

百九十センチメートルはあるうかという長身に、岩をノミでこそぎ落としたような荒削りの強面はそれだけで迫力満点である。  
職場では責任ある立場ということもあって、短く刈られた髪もパリツとしたスースも意識された清潔感に溢れてはいるのだが、丸太のような手足とずんぐり逞しい首筋、胸板から腹筋にかけての固太りした厚みは、如何ともしがたい威圧感をふりまいていた。  
スポーツジムに居たつて注目される男が、手芸店にて目立たないわけがないのである。

そして、この手芸店で働く宇佐野まみこも多分に漏れず、彼が入店したときから大きな背中をそれとなく目で追っていた。

常連の奥様方や此処どんぐり手芸の店長は「あんな殿方が手芸をなさるなんて意外よねえ」などと含み笑いで冷やかしていたが、宇佐野はとすると、まるつきり悪意のない好奇心で地に足つかぬ興奮を覚えていた。

あんな立派な体躯の男の人、どんな手芸に興味があるのかしら。

模様編みの付け襟？花柄のブックカバー？クロッシュレースのモチーフ？麻ひものかばん？それともやつぱり、あみぐるみかしら？

身の丈一メートルのヒグマが大きい背中をしょもつと丸め、鋭い爪でこちよこちよ靴下を編んでいる。

夜なべに疲れ、そろそろ寝ようかと向かつたベッドには、これまたむくむくの編みぐるみや縫いぐるみが所狭しどぎゅむぎゅむ並んでいて。

ヒグマはそれらを漬さないよう、ちゃんとベッドに横たわってお気に入りのもふもふを抱っこして眠る。

「店員さん、八号の棒針つてあります？」

はっ！いけない、見ず知らずの男の方に、ヒグマ、だなんて。失礼だわ。

宇佐野は我に返つて接客しながらも、時折ヒグマの手仕事を妄想してはむふふと楽しんだ。

今日一番の自信作だつた白兎に、いち早く目を付けた彼。あのヒグマみたいに大柄な人が、もこもこ白兎をむぎゅつと膝に抱いて編みぐるみを作る姿を想像したら、なんだか胸のあたりがぽかぽかして居ても立つても居られない宇佐野なのであった。

職場のデスクにずらつと並んだ毛糸の兎たちを眺め、ビリビリ。「なつたと武は甘いため息を吐いた。

あれからも武はさつちり週に一度、どんどん手袋に足を運んでは白兎を購入している。

手ぶらで店を出るわけにいかないといつても、彼が購入出来そうな商品といえばそういうた雑貨くらいしか無い。

その中でも武が毎回あの白兎を選んでしまうのは、やはり彼女にそつくりなふくふくほっぺに「連れてかえって？」と言われているような気がしてしまつからだ。

さて、何度も通つているだけに、頭に血が上りやすい武がちよっぴり冷静になつたのかといえば、いやいや全くそうではなかつた。

むしろ来店を重ねるにつれて、少しづつ心を許した表情を見せてくれる宇佐野にはますます入れあげてしまつている。

客商売ゆえと頭では理解しているものの、たまらないものがある。はじめは草の陰からこぢらを窺つようにしていたしろウサギが、今では膝の上にぴょーんと乗り上げて鼻をすぴすぴさせながら「いらっしゃいませ」と言つてくれるのだ。  
もちろん、妄想だけれど。

毎週兎の編みぐるみを買つにくる「ゴシ」に男を宇佐野だつて訝しく思つてゐるだらうに、不躾な質問などしてこない。

ただ、武が兎の編みぐるみを手に取ると、まる丸お団子をぱちぱち、嬉しそうに口をむにゃーっとさせただけである。

彼女のことを持つと知りたいと思つて、武は『はじめの二ヶ月』なる入門書を注文してみた。これでは、彼氏の趣味に合わせてゴルフや競馬を始める女の子とまるで変わらない。

「あれ、熊本さん。そのぬいぐるみ貰ったんすか？」

「編みぐるみだ、と思いつつ。「セレブれるな」という顔を一生懸命してみたけれど、入社したての後輩には通じない。実際誰に通じたこともないのだが、横着な武はなかなかだんまりの癖が治らないのだつた。

「もしかして、彼女さんへのプレゼントっすか？」

「これまた「違ひや」という顔をしてみたわけだが、一人で納得した後輩はすでに給湯室へと消えていた。  
せっかく口があるんですけど、少しあ話しになつたら？武は、兎たちの視線にそう責められている様な気がして座りが悪い。

男は、ここ一番つてときには話すため口がついてんのよ。  
武はまたしも、「そう思わないか？」と顔で語りかけていたのであつた。

＊＊

宇佐野は今日も、店番の暇を見て販売用の作品づくりに勤しんでいた。

ときに、宇佐野は近頃妙に浮き足立つてゐる。  
週に一度ほど顔を出すよつになつた例の客のことだが、気になつて氣

になつて仕方ないのだ。

それもまあ、無理からぬ話である。

六年間一貫教育の高等女学校を卒業し、そのまま女子短期大学で現在を過ごしている彼女にとって、異性との接触は一大事と言つても過言ではないのだ。

これといった努力をしない限り男性とお付き合いする機会は降つて湧くものでなく、積極的とは程遠い宇佐野はしたがつて娘盛りを半ば棒に振つていた。

そんな生活を送る中で出会つたあの男性は、あまりにも強烈にオトコを意識させる存在であった。

浅黒い肌、きりつと太い眉、低い声、そして宇佐野が両手を回しきれないほどの分厚い身体。

あんまりじつと見ていたは失礼に当たると後ろめたく思いながらも、宇佐野は彼のむせかえるよつた雄々しさに「ふおおおおお」と圧倒されるばかりである。

店長は彼が来るたびに、またヒグマがやつてきたわ、などと嫌がつてゐる。

この間など「宇佐野さん、あなたどうして彼にああも睨み付けられているの?」と同情されてしまつたが、宇佐野はその件に対しても肯しがたいものを感じていた。

ヒグマさんは睨んでいるのではなくて、会釈というかはにかんでいるだけだと思うのだけれど、といつ具合なわけで。

眉間に皺を寄せ三日眼をギラギラさせている彼の形相がはにかみに見えるのだから、魚心あれば水心ありとはまさこへいのことである。

その彼が兎の編みぐるみを手に取ると、まるで本物の熊が兎を捕まえたみたいでどうにも和む。

といつのも、食べるためといつもりは、可愛くて思わず寝床へ連れて帰る、といった佇まいなのである。

そんなわけで宇佐野はこのところ、兎の編みぐるみを作る際には「ヒグマさんとのこりにお嫁にいくのよ、可愛がつてもらってね」という妙な親心と不思議な羨望を覚えている。

はりや、あたしつたら、ヒグマさんのお嫁さんになりたいのかしら？

そこまで考えて、彼女の頬はぼつと赤くなつた。

だめだめ、もう、私つたらなんてはしたないのかしら。

。

彼はお客様で、お付き合いしているわけでもないのに  
武の妄想の中で自分がどんな破廉恥な恰好をさせられているのか、  
知らぬが仏である。

白兎に着せるウエディングドレスを縫いながら、宇佐野は胸の奥の  
一番やわらかいところがむずむずと息苦しくなるのを甘受していた。

同じ頃、武は抜き差しならぬ状況にあった。

休出の帰り、いつものようにどんどんぐり手芸へ立ち寄ろうとしたところ、近くの工務店へ営業まわりしていた後輩にばつたり出くわしてしまったのである。

しかも、半分店へ足を踏み入れた状態で。

「なんだあ熊本さん。」ここで彼女をさくのプレゼント収集してたんすね

断じて違う、と思い切り口を切った顔をしてみるわけだが、案の定伝わらない。

「俺ものぞいてみよつかな。」うちのも、こう二つの好きかもしれない

いー

じゃあ今度女を連れて他の手芸店へ行けよ、と武は取まつの悪さを感じていた。

昼飯を奢るとでも言ひついでを退散すればよかつた、と入店してから思いつくあたりが彼の彼たる所以である。

ぐるりと店内を見渡したといふで、レジ横のテーブルで縫い針を持つ宇佐野と田が合つた。

ほにゃ。今日も、武の不器用な笑み（のつまつの形相）に心えてくれる彼女。

ああ、何て可憐なんだ。

「こらしちゃこま・・・

「あ、これっすね？熊本さんが彼女さんにプレゼントしてやつ

ぶおん。武は勢いよく後輩を振り返つた。

なんだと「いや、よりもよってこんなとこりで適切ないとを言いやがつて。彼女に聞こえていたらどう責任を

「・・・あ、やっぱり恋人の方へのプレゼントにして頂いていたん

ですね？」

「やうみたいですよ。彼女の部屋を兎小屋にする勢いです」

「編みぐるみの兎さん、『 McConnell』にして頂いているんです」

「ちがう、彼女なんかじゃあいませんよ」

彼にしては、めずらしく声に出して否定した。

「またまたあ」

「照れちゃつて」

彼女なんかじゃありません、あの兎、あなたに似ていたから思わず手に取っちゃったんです。といつも、そもそもこの店に来る口実に過ぎません。

さてどれから言い訳しようかと考えているうちに、果たせるかな機を逃す。

というより、言葉にならなかつた。

俺と彼女は、何か言い訳をするという段階にも達していないわけで、その局面へ行き着く前にふんわり積み上げた「きゅん」は吐息とともに霧散していった。

あとには、ガラスの破片を飲み込んだような差し込みが残るばかりである。

恋人の方へ編みぐるみ、素敵です。そう話す彼女を前にして、武は胸の中で徐々に育つていったそういう《、，《、，《》何がへなへなと萎んでゆくのを感じた。

あえかな火花が臓腑をちりちり燻らせる中、炎が大きくなる直前の高ぶりは、最も口当たりの好い勢いを失ったことで尻すぼみになる。

結局、気づけば武はなにも購入せずにどんどんぐり手芸を後にしていた。

「熊本さん、昼メシどうで食つていきません?」

「ひとりでいけ」

男一人連れを見送った宇佐野は、ひどく興を削がれたような心地であつた。

あのヒグマさん、恋人、居るんだって。

そういう『、、、、』何かがはじまりそうな予感は、出鼻を挫かれてしまつたのだ。

もうちよつと、あとほんのちょっと手を伸ばして彼の指に触れれば、沖融たる気味合を噛みしめられそうだつたのに。

この踊り場よりもはるかにあつたかくて、ふこふこで、とろみがあつて、力強い何か。

恋に恋する一步向こう側は、宇佐野が思つてゐるよりもずっとぐずぐず元にあつたのだ。

大事に大事にお嫁へやつた白兎たちが彼のねぐらではなく彼の恋人のお部屋に並べられるのかと思うと、矢も盾もたまらない。だってあの子たちは、ヒグマさんのお膝でもぎゅっと抱きしめられるはずだったのに。

「まみちやん？」の商品、配達行つてきてちょうどいい

ほんやつと店長から小包を受け取る。

どんぐり手芸は配達も承っているのだが、経費節減のためにあて先が近所だと店員が足で届けている。

店番は一人で十分なので、大抵は宇佐野がその配達人の役割を負っていた。

「はあ…・・行つてきます」

「今日はそのまま上がつていいからね」

なんだかとつても、白けた気分。つまんない。つまんない、つまんない！

「なんて言つていても、仕方ないよね」

これではよくないわ。お客様に失礼な、とつてもぶちやいくな顔をしてしまいそうだもの。とりあえず気持ちを切り替えて配達に行きましょう。

あて先は、えつと 熊本武さん。

\* \*

届け先の住所は、トタン屋根のバルコニーが今にも腐り落ちそうな風情の小さなアパートメントであった。

「同じじこの社宅であるという赤錆びの浮いた看板を横田こ、宇佐野はインターフォンを押す。

「はい」

「すみません、お世話になつてありますどんぐり手芸から商品をお届けに参つたのですが」

ぱきつどたたた。

インターフォンの受話器が壁にぶち当たる衝撃に続いて、家主のけたたましい足音。

わざわざそんなに急いで下わらなくとも結構なのに、律義なお客様だなあ。

宇佐野はそう思いながら、右手で気休め程度に前髪を整えた。すぐさま、重たそうな玄関扉が開く。

「あつ……」

「……………」

先ほどまで宇佐野のちいちな頭を占めていたまさにその人が、きまり悪そうに頭を下げた。

その拍子に、玄関先の棚が目に入る。

靴棚の上に並べられているのは、見間違えよつもない、宇佐野の手で編まれた白兔たちだった。

「その、印鑑をこちらにお願い致します」

「……お世話様です」

シャチハタでぼむと認印を押した彼は、受領書を握りしめたままの  
つそり動きを止めた。

おや?と思つた宇佐野がバックカーボン紙をちょいちょいと引つ張  
つても、彼はそれをぎゅっとしたままピクリともしない。

「お姫様?」

「熊本です」

「えつと、熊本様?」

宇佐野がその名前を口にした瞬間、武はくわつと面を上げた。  
何やら思いつめた表情で、意思の強そうな眉が今はしゅんと下がつ  
てこむ。具合でも悪いのだらうか?

「あのー。」

「ひゃーーー。」

「話があるんですけど……ちよつと中、寄つてこつてもうえませんか  
?」

「はー」

「え?」

「へ?」

何をどう転がすかという腹づもりをつける前に、武は意を決して彼女を引きとめた。

この機を逃してなるものか。物ぐさなヒグマは気付いていないけれど、彼は彼女のしつぽを追いかけてもうずつと前からその重い腰をあげていたのである。

そういう『、・・・』ほどほりは、それと心づく前から武の身を焦がしていた。

しかし、二つ返事で彼女が部屋にあがるのを了解するとは武も予想だにしていなかつた。

今も、きょとん、と武を見つめる宇佐野を信じられない気持ちで眺めている。

どこの世に、赤の他人である男の部屋へ無防備にあがりこむ女がいるだろうか？

武の想像をはるか超えてお人よしの彼女は、己の放り投げた爆弾にこれっぽっちも気付くことはなかつた。

話があると言われたならば、ああ話があるのでなあと思ひ。

それ以上のことも以下のことも、起らるなんてことは全く想定していないのである。

加えて武のただならぬ雰囲気、宇佐野はぼんやりと「何かお手伝いでも頼まれるのかな？」と彼の体調を慮つたり、てんで的外れな心配をしていた。

そういうわけで、L字ソファに腰掛けた一人はまんじりともせず口

一 ヒーを飲んでる。

宇佐野は、頼みごとならいつでも切り出して下せりたら良いのにあれでも何か雰囲気ちがくない?と。

そして武はもちろん、弁解の機をつかがっていた。

もつ少しスマートなやり方があつたような氣もするのだが、今からだつて遅くないはずである。ほら、昔の人も言つていいではないか。うさぎ見て犬を放つ、と。

実は手芸店の近所で見かけたときからあなたのことがずっと気にかかり、野暮つたくも店に通いつめたりしていわけなんですが、会つたび会つたびもうあなたにどうやつても触れてみたくて仕方なく、かわりに兎をしこたま買い込んでしまう始末、つきましては俺の恋人なんていう存在は全くの事実無根でありまして、とどのつまり

「彼女なんていらないんだ」

やはりどつ立ち回つても手際の悪い武は様々に口上を考えた拳句、しかし最後の結びだけがぽろつと口から零れ落ちてしまつたのだった。

いやはや、これはまずい。

宇佐野の方へ体ごと向き直り、武は続ける。

「その、あなたに誤解されたままでいるのは我慢ならないんだ。玄関の兎だつて、本だつて……！」

勢い余つて語氣の強まる武は、まるで獲物を前にしてがるるると低く唸るヒグマそのものであるように宇佐野には思われた。

これは何というか、私の自惚れでなければ、ひょっとしてやうこつ  
『、、、、』『霧囲気なんじやあ ？

あれ、あれあれあれ、と宇佐野は泡を食つ。

この期に及んで彼に「実は腕を怪我してしまつて、かわりにそこ  
の電球替えてもらえませんかね？」などとは決して言われぬであらう  
ことを肌で感じていた。

己の勘違いではなかろうかといつ恥じらうこと、すぐそこへ一步向こ  
う側が控えているかもしぬない期待が入り乱れて、宇佐野の視界を  
狭くする。

氣を落ち着けるように何度も何度も武が深呼吸する。

そうすると徐々に部屋の空氣が薄くなつていゝような氣がして、宇  
佐野は頭がくらくらした。

待つて、待つて、あとちょっとだけ。

本当は一時も待つていられないせに、宇佐野はそう呟び出したく  
なつた。待つて、でも、はやくして。

「つまりその……す……」

ええい、ままよーと心で掛け声をしたといひで、肝心の言葉がなか  
なかどうして出でしない。

あとちよつと、もうちよつと、と意氣込むうち、武はどんどん宇  
佐野のほうへじり寄つていた。

気づけば、もう膝が触れ合つほどの距離である。

「宇佐野さんのことが、その……」

武にひとつは氣の毒な話ではあるが、もうひと段階において宇佐野

は彼の話など半分も聞いていなかつた。

つん、と膝が触れ合つた瞬間、何ともいえぬ痺れが体中を駆け巡り、甘やかな吐息がふう、ふう、ふうと漏れる。

だめ、もう、やつぱりはやくしないで、待つていて、あとちょっとー

腕を胸の前できゅっと組み、宇佐野は武の顔を仰ぎ見た。

男の顔には紛れもなく、食べてしまいたい、と書いてあつた。

少なくとも宇佐野にはそう見えたのであつた。

「だから、す・・・」

気づけば、武は彼女をソファの一一番端まで追い詰めてしまつていた。そりやあ、大男にじりじりと膝行られて逃げぬ女性など居ないだろう。

彼女はまるで、ケージの隅っこでふるふると震えるウサギだつた。怖いこないで触らないで、と。

ぶわっと皮毛を膨らませ、耳をべつたり伏せながら、一生懸命こちらを警戒しているウサギさんである。

たまらない、武は思つた。

食べてしまいたい。

ふ、ふ、ふえ、と泣き出す直前の子どものよつな彼女の表情は、嗜虐欲と庇護欲を同時にみもみ刺激した。

ちょっぴり下がつた目尻が赤らみ、涙のベールでまんまるお皿皿がきらめくその顔を見たとたん、もう武は考へることを投げ出し、両手を伸ばしていた。

あみあみあみあみ、むけむけ。はむはむ。

口付けとこゝよつはむしろ、その大きな口こぼれまぐれ食べられてい

るよつた心地であった。

たゞ、た、食べられてるーと宇佐野さまに混乱のせなかである。腰を引けば、それ以上の力で引き寄せられた。

丸太ん棒の腕にしつかり腰と後頭部を抱きこまれてしまった彼女は、体のどこに力を入れようとも彼の胸から逃げ出すことはできない。ましてマタタビを嗅がされた子猫のようにふにゃんふにゃんの今、よりいっそう彼の固めは決まっている。

後ろ頭を揉みしだくよつにして「めぐく彼の手のひらが、豊かな髪と共に彼女の心まで指に絡め取つてゐよつた。

この逃げられない感じ、なんだかすごくいい気持ちかも  
いやふにやして、もう、どうにでもしてほしくなる?  
体がふ

「ん…」

佐野のむにゅとした口元を見たとたん武の理性は焼き切れ、血の巡りを悪くした脳みそは痺れのきている足腰に思考の先行を許しつつあつた。

わずかな抵抗を示して、てしてし、と彼の腕をひつかくお手手が可愛くてたまらない。

形の良い頭を撫でわすればむずがり、その上、ブレジャーの固い布地の感触が胸元にむにゅうつと沈んで、もう、もう、もう。

武は、もやもやとした熱がぐつと腹に溜まるのを感じていた。

胸にすりつけられると、じりもかしりもふにふにの、いとしいこの娘。こんな状況下でも俺の足を踏まぬよう足をべったり畳んだこの娘が、可愛くて可愛くて、じりじてか胸がはりをけそつだ。

武は、自分で勝手にふんがふんがと彼女のお口を食りながら、皿じつに呪讐の涙を浮かべた。

「ん…」

よつやく彼女の唇が解放されたとき、部屋の空気は一変していた。口腔でしつこく吸い弄られた舌が、じんじんと熱をもつてたまらない。

宇佐野は思った。ああ、これが恋なのかしさ。じつ、叫びだしたくなるような、むずがゆい、もじもじしてしまつ感じ。  
なんて心地よくて、えつちなんだらひ。

「宇佐野さん、やの…」

いまだ呪つの尾に引かれて心をたゆたわす武は、ふとキャビネットの上に「かづ」を見つめる白兎と視線を交わした。  
せつかく口があるんですけど、少しだけ話しそうになつたり。そんな悪戯する前に…

男は、一一一一番とこいつと少し話すためつこつこる口をあくべつと開いた。

ねわつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5369y/>

---

ウサギ見てクマを放つ

2011年11月15日10時42分発行